

高校現代文における《女のことば》へのアプローチ

田 口 かおる

1. はじめに

本稿は、富岡多恵子著「『女のことば』と『国のことば』」（三省堂「三訂版 新現代文」所収、評論集『藤の衣に麻の衾』1984. 4 中央公論社 より抄録）の都立普通高校での授業実践をもとに、第2回ワークショップにおいてなされた小林美恵子・田口かおるの共同発表を下敷きにしている。

上野千鶴子氏は「女にとって『失われた母語』（＝「女のことば」－筆者注）がどんなものか、誰にも痕跡さえわからない」中で自らを「男仕立ての言語＝男の論理によって女の心を書く」「フリーク」と呼んでいる¹⁾。

「女のことば」が実体として存在するのかという問いをこえて、女であるがゆえに自身のことばで意のままに語っていけない障壁を体験したことのあり者にとっては、「女のことば」をネガティブなものからポジティブなものへ転化させようとする富岡氏の提唱は、刺激的、かつ実感的に受け入れられるに違いない。

事実本教材は、私たちが日常的に語りもし、論じもしてきた「女のことば」を扱っており、個人的には問題意識をかきたてられる刺激的な作品であった。しかし、それゆえにこそ「授業」で教材として「教える」という点での難しさを常につきつけられつつ格闘した、というのが正直な感想であった。

なぜ、思うように生徒たちに語りかけられなかったのか。なぜ、苦しかったのか。実はその「苦しさ」の中に、学校現場で「女のことば」を扱う際の問題点と切り込んでいく視点があると思う。

2. 作品としての「『女のことば』と『国のことば』」

本教材の新しさは、「疎外」され「差別」されることばとしての「女のことば」をとりあげ、女がどのようにことばを使っていくべきかを論じた点にある。具体的には「公私の間でバイリンガルを強要されている」女が、「エスペラント化」した「女のことば」の使用によって、「バイリンガルを弱み

でなく強み」にしていこうというのである。

内容についての検討が主旨ではないので、論点を以下に列挙する。(各項目は順不同。※は教科書で省略されている部分である。)

* 「女のことば」とは何か

- 「性の著名」としての「女のことば」
- 「女のことば」は、「地方のことば」と同じく書きことばでない。
- 国会の質問で「女のことば」でしゃべることは許されない。
- 「うちの主人は」は「女のことば」である。
- 「女のことば」は女の文化を背負い、またそれ自体で女の文化である。
- 言語の科学は「女のことば」の「深層構造」に及んでいない。

※「男のことば」が支配している社会では「女の言葉」は方言の一種。

※「ことばは階級の手形」であり、「女のことば」も隠語符牒。したがって、男にはわからない。

* 女の使うことばの実態

- 「女のことば」による評論はありえるはずであるが、「女のことば」であるゆえに男はそれを無視する。
- 「男のことば」への無責任なりかえ
- 「男のことば」による評定に媚びる「女のことば」(「女流」「女なのによくやる」という評定)
- 「女のことば」の「国のことば」の強制によるピジン化

* 《エスペラント》の提唱

- 「女のことば」でなく、過渡的にエスペラントを使わなければならない。
- ことばが背負っている文化を排除している「中立言語」
- 「女のことば」や「国のことば」が男や国に通じることば(共通語)を求める時に、一種のエスペラントの必要性(「国のことば」は共通語でない。)
- 「政治」「性事」へのエスペラント化した「女のことば」による働きかけが必要。

一見してわかるように、《女のことば》や《エスペラント》を明確に定義して使っているのではなく、「女のことば」という実態・体系を論じている

のではない。教科書省略部分に明確に述べているように、「『女』という普通名詞も、女自身がしばしば『差別語』として使って」おり、「女が『女』にもつ差別意識は社会的階級意識²⁾」と指摘して、女はことばの使用について「言語的にラディカル」であるべきだと言うのである。

3. 「拒否」の感覚

授業で作品を扱う時、「教師が作品をどう読むか」「教材として、何をどう教えるか」という、「作品」から「教材」への橋渡しが当然のことながら必要になる。

本教材原文の初出は「婦人公論」(1983)である。作品としての「『女のことば』と『国のことば』」は女がどのようにことばを使っていくべきかという問題を、成人の女性を読み手と想定して書かれたものと考えることができよう。しかし、教材として扱う際は、読み手は「男女」高校生に据え直される。内容＝主張を読み取らせる(＝「教材を」教える)と同時に、男子生徒にも普遍化していける観点を提示していく(＝「教材で」教える)必要がある。

一般に授業では、教材で提出された問題を意識化していない生徒たちに「発見」させること、身近な生徒の体験・感覚と抽象的な概念とを結びつけながら「ことば」を実感させて抽象化・普遍化していくことが繰り返される。

もちろん本教材でも、語彙・敬語・言葉遣いの問題、「男の論理・女の非論理³⁾」の真偽の問題等、さまざまなことばや用例の分析を通して本文の読みを進めることになった。そして同時に、ことばは使い方次第でさまざまな差別を生む(2章参照)という本質的な機能を検証しつつ語ることもなった。「発展」の形で普遍化するのではなく、「同時に」普遍化していく難しさを本教材は抱えていたといえよう。

しかし、今回の授業を進めるうちに、別の難しさを感じるようになった。生徒たちの中に見られる潜在的な「拒否」の感覚である。それも、その「拒否」の感覚はむしろ男子生徒より女子生徒の中に根強い。

「拒否」の感覚はどこからくるのか。

今回対象にしたのは、幸いなことに不当に差別されることがない、または差別されたという意識を持たされていない生徒たちである。また、彼らは「差別は悪いこと」であり、自分たちは差別したことの無い人間と思っている。わずかに兄妹・姉弟間に不平等感がある場合等に、差別の問題が意識化されているにすぎない。

しかし現実には、男女同数の学校であっても生徒会長・委員長・部長は男子生徒が多かったり、生徒自身も社会の性役割分担を当たり前のことと見ていたりというように、彼ら自身無意識の内に差別構造の中に入りこみ、差別構造自体を内面化していることが多いのである。

本教材が、「女」という被差別側からの差別側への抗議なり、差別構造への批判といった面をも含み持っているとすれば、当然その批判は、差別構造を内面化している生徒にもむけられていることになる。無意識なればこそ、そういった問題の指摘は「拒否」の感覚を呼びおこすのだろう。

一方「わざわざこんなこと言わなくても良いのに…」と女生徒自身も言うことも多かった。所謂差別語・差別表現を指摘すると、「差別意識のない人の心の中にまで差別意識を実体化させる作用⁴⁾がある」と言う。反フェミニズム派に女性が多いように、あらゆる差別に被差別側からの「拒否」があるように、高校生にもカテゴリーとしての「差別される側」であることを殊更際立たせることに対する潜在的な「拒否」の感覚がある。

さらに付け加えれば、授業という場において教材と読み手の間に介在する「教師」という存在も「拒否」の感覚とは無関係ではないのではないか。

教師がいかに客観的立場を取ろうと、教師は「中性」ではありえない。教師が「男」であり「女」であることは、カテゴリーとしての「差別する側」と「差別される側」のいずれかに属するほかないことを表している。

「拒否」の感覚に分け入って、いかに「発見」させ普遍化していくか、授業という場でも、誰が、どんな対象に、どのように語るかというストラテジーの問題は避けて通れない大きな問題である。そして、「差別する側」「差別される側」の教師が、「差別する側」「差別される側」の生徒と個々にかかわりながら、授業を通してお互いの「差別」の意識をどのように変革

し、自ら変わっていくか —— 決して一方的では終わらない、動態であるべき授業での最大の課題である。

4. 「国語」教育と差別

国語教育に限らず、学校教育の場では「差別がないこと」が大前提となっている。教師が「差別しない人間」であるべきことも同様に了解事項である。教科書においては、差別的な表現や差別用語を使わないことに細心の注意が払われる。教育の場は「差別のないモデル世界」を期待され、そのイメージを背負って成り立っている世界といつてよい。

富岡氏は本教材で「『学校』『国語』『中央』というラインにしたがって、ひとはどんどん『国のことば』を習得していく。そして『母のことば』『地方のことば』を失い、またそれらのことばを恥じるようにしむけられていく」と述べている。

「日本語」を対象とした授業が、カリキュラム上「外国語」に対する「国語」という名で一貫して呼ばれているように、また「学校における『国語教育』は、むしろ『言葉を通して国民を作る教育』としてあり、『国語』は『国民が規範として身につけるべき言語』として位置づけられている⁵⁾と指摘されるように、「国語」教育が「制度」の上で位置づけられている以上、「国語」は「制度」であり、「価値」であり、「差別構造」そのものである。

さらに「言葉は使われることで差別の機能がはたらく仕かけをもって」おり、「いろいろの『差別語』を『いい替え』でのがれてはいるが、いい替えられたことばも、ことばそれ自体によって差別を受けたものである⁶⁾」また、「水」という表現すら「なんだこんなもの、ミスじゃないか。」という文脈のなかでは差別の表現となり得る⁷⁾のである。ことばは決して「中立」ではありえない。

したがって「差別のない」はずの「国語」教育は、「制度」という差別と、言語そのものの差別を二つながら内包しているといえるのである。教科書における差別表現が、特に際立った形で問題化されるのもこのことによるのであろう。⁸⁾

そして教師は、教科書が「中立」的であることを装うのと同じように、「制度」のもとに客観的かつ「中立」的立場を装いつつ、生身は一個人として差別し、差別される存在であるという二重性を生きることになる。

5. 二重性を生きるということ

「小説とは、反制度的なもの」と考える作家筒井康隆氏が、高校教科書に採録された自作「無人警察」の表現に対する抗議行動をきっかけに「断筆宣言」したことは、記憶に新しい。

柴谷篤弘氏は、「むしろ、語源にかかわらず、ある文脈では、どんな言葉でも差別語として人の心を傷付けるという事実をひろく知らせながら、なおその存在を社会で隠蔽してしまわないことが望ましいでしょう。」と述べている。⁹⁾

本来ことばは、常にさらされ意識化される中でこそ、そのことばが背負っている問題性を問うていけるものである。しかし一般には、差別表現を糾弾されると「差別表現を指摘された出版社は、多くはやっかいな問題としてのみこれを捉え、差別についての議論を回避したがる傾向¹⁰⁾にあるという。そして、教科書は「中立」的であることを旨とするから、前述のように差別的な表現や差別用語を意識的に避けていく。

だが、本教材のように、ことば自体が用語に関わらず、使い次第で差別の機能を持つことは「言語とはどのようなもので、私たち人間とどのように関わりあるのか、といった言語及び言語表現の特質についての認識を育てる¹¹⁾」上で、重要なことであろう。また、授業をうけている生徒の内なる「制度」に働きかけつつ、生徒自身が内なる差別を持つのではないかと、自ら問いかけ検証していける力をつけることが、究極的に言葉の使い手となるということであるはずである。

このようなことばの機能を意識しつつことばを分析する作業は、自分も差別する人間であること、男が女を差別するだけでなく、女が女を、そして自分自身をも差別する存在であることに気付くことの出発点になる。そしてそれは、日本語を使用することによって「文化」をかかえこんでいるからであ

るということに気付くことの出発点でもある。

教師の仕事は、単に使うと良いことばと使ってはいけないことばの区分けを教えることではない。教師が敬語や言葉遣いを教えながら、一方でことばの持つ差別機能に自覚的であり続けることは、ことばによって縛られ、ことばによって解放されるということ、日々生きることである。

本教材と生徒に対しながらの「苦しさ」はさまざまな二重性を意識しながら、自らのことばを間断なく検証し続けていくことの「苦しさ」であったようである。それはまさしく「言語的にラディカル」であるということだろう。

《注》

1) 「フリーク」『ミッドナイトコール』1990. 2 朝日新聞社

2) 富岡多恵子 本教材の省略部分

「男が女にもつ差別意識は、性的階級意識」と述べている。なお、本教材の省略部分(※も含め)では、差別や差別語、ことばの差別機能を具体的に論じている。これらの省略は、4章で述べる「教科書」の持つ性格から来るものであろうが、それゆえ教科書掲載部分が抽象的、概念的になっていることは否めない。

3) ワークショップにおいて、れいのるず=秋葉かつえ氏によって、「方法」としてカオスの状態(過程)を文章化するか結果のみを文章化するかの違いであり、「結果」として示される文章が「論理的」である条件ならば、「非論理」は女のものだけではないという指摘があった。

4) 池田清彦「I 往復書簡 差別と表現 書簡③再び、池田清彦から柴谷篤弘へ」柴谷篤弘・池田清彦編『差別ということば』1992. 9 明石書店

5) 小林美恵子「『国語教育』と女性」『ことば』13号 1992.12

6) 富岡多恵子 本教材の省略部分

筒井康隆氏は、朝日新聞のインタビュー(1993. 9.18. 夕刊)で、「差別的」と制限された表現をほかの表現に言い換えることについて「言い換えたために、より一層差別的にもできるんですよ。表面上のことでは

ないんです」と述べている。

- 7) 田中克彦「『単語』から『文脈』へ」『国家語をこえて』 1989. 9
筑摩書房
- 8) 筒井康隆氏は、6) のインタビューで「僕の作品が教科書にふさわしくないという見方がある。教科書は制度の最先端に位置するものですからね。」と述べている。
- 9) 「I 往復書簡 差別と表現 書簡②柴谷篤弘から池田清彦へ」4) に同じ
- 10) 池田清彦「I 往復書簡 差別と表現 書簡①池田清彦から柴谷篤弘へ」4) に同じ
- 11) 鳴島 甫「高等学校国語 I の言語・言語表現教材」『日本語学』1993. 2

(都立日野高校)